

# 伝灯奉告法要団体参拝にて

横山組 団長 光善寺 住職 鶴田英憲



このたび、平成28年11月24日に行われました、ご本山伝灯奉告法要に早良組横山組7ヶ寺計71名で団体参拝いたしました。

私も法要開始より、かなり早い時間に入場いたしましたので、周りは空席が目立っておりましたが、開始時間が迫るにつれて、堂内にみるみる人が増え、あつという間に満堂になりました。

満堂となった堂内で、誰からともなく「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とお念仏の音が聞こえ始めました。

そして、いよいよ法要開始になると、堂内がお念仏の声でみちみちていきました。小さなお念仏の音が、やがて全員の大きなお念仏になっていく様子は感動的でした。

生まれた場所も、育った場所も、まったく違う方々が、ともにお念仏をよりどころの「灯」とし、新しいご門主よりその「灯」が「伝わる」ことをともに喜ばれ

る。私自身、このご縁に遇わせていただき、「灯」を「伝える」ことに、微力ながらお力添えをしたと思わずにはいられませんのでした。

このような数十年に一度のご縁に自坊のご門徒はじめ、横山組の法中の皆様とご門徒の方々と一緒に遇わせていただいたことは、大きな喜びでございます。

台挙



横山組 第二班

## 平成28年度 早良組子ども報恩講



平成28年12月26日(月)重留の浄覚寺を会所に「早良組子ども報恩講」をお勤めしました。51名のお子さんが参加の中、お勤めご法話の後、イラストレーターの諫山直矢さん、デザイナーの北寄剛司さんをお招きしてイラストのワークショップをしていただきました。子供達は日頃お世話になっている方へ送るポストカード作りを体験。ペンや鉛筆で色を塗るだけでなく、テープやシールも上手に使って、十人十色の仕上がりでみんな一生懸命頑張りました。これからも子ども達のご縁作りのために青少年部を中心に早良組全体で活動していきたいと思えます。

### 早良組オリジナルTシャツ

また今年度は早良組Tシャツの製作もいたしました。お陰様で、多数ご購入いただき、誠にありがとうございます。このTシャツの売り上げの一部は、熊本地震災害義援金として熊本教区に納めさせていただきました。前回、ご案内が遅くなった為、ご購入いただけなかった方が多数おられるという声があり、今年もTシャツ製作をさせていただこうかと考えております。5月以降順次ご案内していきますので、ご協力お願いします。

### 報恩講スタンプラリー

今年度から新たな試みとして「報恩講スタンプラリー」を始めました。お陰様で沢山の方が、報恩講のご縁にお参りいただき、いつも賑やかな報恩講となりました。ご案内の通り、10ヶ寺以上お参りされた方は、お手次のお寺様までスタンプ台紙をお持ちください。後日記念品を差し上げます。



### 早良組からの お知らせ

「離郷門信徒の集い」が、本年7月1日東京築地本願寺にて、関東に在住している方を対象に「関東在住門信徒の集い」として開催されます。都会に住むお子さんやお孫さんにも、仏縁に遇っていただきたいとの願いから、この門信徒の集いが計画されています。是非一人でも多くの方にお声かけいただき、お念仏の輪を広めるご縁にしたいと思います。ご協力よろしくお願いいたします。

### はじめに

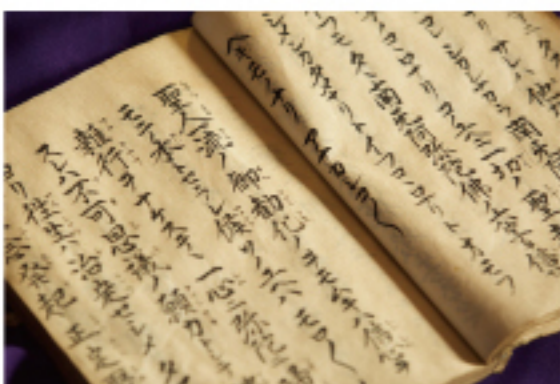
平成26年6月6日、ご本山にて第25代ご門主「尊如門主」の法統継承式が行われました。脈々と受け継がれてきた阿弥陀様のご法義。しかし第3代覚如上人没後およそ百年間、室町時代の本願寺は不振・窮乏のなかにありました。浄土真宗の中心寺院の影もなく、親鸞聖人がおすすめくださったご法義が風前の灯という状況にあったのです。

そんな本願寺に一人の僧侶が現れました。阿弥陀様のご法義を人々に伝えたい。親鸞聖人が慶ばれた世界を伝えたいと、ご尽力いただいたのが「蓮如上人」です。

新聞もラジオもない時代、「御文章」というお手紙をしたため、各地の民衆を教化していかれました。この「御文章」は人から人へと伝えられ、まさに今のマスメディアのはしりであったと、ある先生は仰います。浄土真宗の要を、分りやすくまとめ、てくださったお陰で、浄土真宗のご法義は瞬く間に広まっていきましました。また宗教儀礼の簡易化を計られ、朝夕の勤行は、従来の「六時礼讃」にかえて「正信偈和讃」を依用さ

れました。さらに、六字名号を筆書して授けられたことよって、上人直筆の名号は、礼拝の対象となりました。「御文章伝道」は民心を教化し、「名号授与」はその民衆を組織化する上で、甚大な力を発揮したのであります。現在でも中興の祖と呼ばれ、各寺院の内陣には親鸞聖人と並び御絵像が安置されています。蓮如上人がおられなかったら、日本はキリスト教の国になっていたという方もおられるほどです。

私たちが今、このご法義に出遇えたのも、蓮如上人が「御文章」をお書きくださったり、伝えてくださったお陰かもしれません。そこで今回は、蓮如上人のご一生を伺いながら「御文章」に込められたお心を味わってみたいと思えます。



今川家(照安寺門徒)所蔵

# 早良組 だより



## 「御文章」に込められた思い。

平成28年 早良組仏壇報恩講(妙福寺にて)

## 蓮如上人の生い立ち

蓮如上人は、応永22(1415)年、第7代存如上人のご長男として、京都東山で誕生されました。その当時大谷本願寺は、「人跡たえて参詣の人、一人も見えない寂さびとした状況だった」と伝えられています。

生母につきましては、その名前さえ定かでない、父・存如上人の母に仕えていた方といわれています。存如上人が、正式に如円尼を正室に迎えたことで、生母は本願寺を出て行きます。上人6歳の時でありました。生母はまだ幼き上人に、鹿の子の小袖を着せて、「どうかあなたの手で、聖人(親鸞)の御一流を再現されるように」との言葉を残されて、姿を消されました。



影の御鹿子  
のこ

蓮如上人の生母を慕う心は深かったようで、後年、生母は西国の人で備後に住んでいるらしいとの噂を聞いて、使いを派遣して探されたこともありました。生母を見つけることはできませんでしたが、上人は生母が本願寺を退出した12月28日を命日に定め、生涯にわたって法要を欠かさなかったといわれています。

## 激動の時代

蓮如上人は17歳の夏に、青蓮院にて得度され、43歳のときに第8代の法統を継承されました。継職されて8年目の寛正6年に比叡山の僧徒によって大谷本願寺が破壊(寛正の法難)されたのですが、上人は近江にその居を移されたものの、そこに安住されることなく、近畿各地を始め、伝道教化のために遍教を続けられたのです。そしてついに越前の吉崎に坊舎を建立され、念仏者の聖地を開かれました。

吉崎における上人のご教化は5年に及びましたが、その間民衆の帰依は



真教寺所蔵

日を追うごとに高まり、お堂の完成につれて、門前市ができるほどだったそうです。

しかし、吉崎御坊に人々が集まれば集まるほど周囲の権力者や他宗との間に軋轢(アツキ)が生まれます。また、本坊の火災もあって、退去を余儀なくされ、上人は吉崎から若狭をへて、摂津・河内方面をご遍教されます。門徒の間には皆で間法できる御堂の建立を望む声(アツキ)が広がり、文明10(1478)年に5年がかりで御影堂・阿弥陀堂からなる山科本願寺を建てられたのであります。ついに、本願寺の再興を果たされたのであり、門前には吉崎御坊と同様に多層が並び寺内町が形成されました。「寺中は広大無辺、莊嚴ただ仏國のごとし」と言われ、以後、真宗他派が相次いで多くの門徒とともに帰参し、本願寺は全国的な教団へと発展しました。

上人は、75歳の春末如上人にその職を譲られます。また、明応5(1496)年には、大阪に石山御坊を建てられ、山科本願寺と石山御坊をしばしば往来されご教化に専念されました。そして、明応8(1499)年3月25日波瀾に満ちた85年のご生涯を山科本願寺にて終えられました。

## 御文章

蓮如上人の教化の大きな特徴としてあげられるものに「御文章」による伝道があります。御文章とは法語が記されたお手紙のことです。最初の御文章は、継職後4年目の寛正2(1461)年に近江金森の道西の要

請によって書き記されました。いわゆる「お筆始めの御文章」とよばれています。これ以降、85歳でご往生される前年まで出された御文章の総数は二百数十通あったと言われています。蓮如上人の御文章伝道が大々的に展開されるようになるのは、文明3(1471)年に越前吉崎に赴かれて以降のことです。それ以前の大谷本願寺・近江国転住のころは、比叡山との確執が相次ぎ、安住できない状況にあり、御文章の作成数はきわめて少ない状況です。また内容はご法義を説くことのみ限定されています。ところが吉崎に居を構えられて以降は、頻繁に御文章を書かれるようになり、内容もご法義だけでなく、現実の教団の状



況、門徒の信仰生活のありようにいたるまで、きわめて具体的・現実的な問題に触れられたものが多くなっています。

それは、吉崎においては短期間のうちに多数の信者が帰参し、それらの人々をどのように指導し、統制していくべきかという問題と、莊園領主をはじめとする在地支配者に抵抗する反領主行動を戒めなければならぬ大きな問題に直面されたためと思われる。

御文章は浄土真宗の教えがきわめて簡潔・明瞭に説かれ、いわゆる「信心正因・称名報恩」の教えが一貫しています。蓮如上人は親鸞聖人の教えを「千の物を百に選び、百の物を十に選はれ、十の物を一にえりす」と言われていますが、それは不遇な青年時代より宗義を懸命に学んだ成果のあらわれでもありました。

文字を知らない民衆に、親鸞聖人の教えを簡明に伝え、ともに阿弥陀様のお慈悲の中にあること知らせたのでした。これはまさに親鸞聖人の御同朋御同行の精神の実現ともいうべき姿であるでしょう。この結果、北陸のさまざまな人々は、御文章で説かれる教えを熱狂的に歓迎し、吉崎の上人のもとへなだれ込んでいったと考えられます。

## 一問一答



Q 蓮如上人ご在世中、「御文章」はどのように親しまれていた?

A 当時、お手紙としていただいた方が、寄り合いなどで拝読し、読み聞かせていただいていた。

Q 「御文章」をご法話のあとで拝読する習慣はいつから?

A 「ご法話の後には、拝読のご文章をいただきますが、これがいつ始まったかは定かではありません。しかし「実悟記」の文面などから、蓮如上人の後を継いだ実如上人(1458-1525)の頃から始まった習慣と思われる。当時は必ず拝読していた訳でなく、後代になってから拝読されるようになりました。

Q ご法話のあとで拝読するようになったのは何故でしょう。

A 「ご法話の総括として「御文章」をいただければ、浄土真宗の大事な教えに相違することがないからです。ですから「講師は、「ご法話の締めくくり」「肝要は御文章をいただきます」と申し添えてから「御文章」を拝読するのが習慣になっています。

Q 「あなかしこ、あなかしこ」とはどういう意味ですか?

A 「あな」という感動詞と「かしこし(畏し)」という形容詞の語幹からなる言葉で、「ああ、おそれ多い」「ああ、もったいない」という敬意をあらわす言葉です。

「御文章」はあくまでお手紙ですから、一つには内容を強調するために使い、二つには「教具・教白」と同様の意味で、手紙の定型句として使われていたようです。

Q なぜ、頭を下げて聴くのですか?

A 「御文章」の内容は、親鸞聖人のおこころ、ひいては阿弥陀様のお慈悲をお示しくださっています。五百年の時を経て蓮如上人が、私たちの目の前で、「ご教化してください、といたただいて、「ああもったいないことでありました」と低頭して聴かせていただくのです。



平成27年 早良組仏社報恩講(明光寺にて)